

地域への関心や意識を高める

11 文化財アクション・リサーチ:担い手としての高校生



図1、2 第一回栃木市内高校生小論文コンクール(2013)の入選作ポスター



図3 栃木高校生蔵部の結成を知らせる新聞記事

従来の伝建で行われてきたデザイン・サーヴェイは、古い街並みを可能な限り客観的に描出(ノーテーション)し、紙の上で立面図、平面図、断面図として正確に再現することを目指し、研究を行ってきた。近年、「家屋台帳」のような納税に関連する一次資料をもとに、様々な業種が街中にどのように分布していたのかを時系列的に整理し、伝建を構成する建物の多様性を実証する研究も蓄積されている。さらに、古い建物の各所にセンサーを取り付け、耐震性能を抽出・評価する研究手法も編み出されている。ここに挙げた三つの研究方法は、手法は異なるものの、いずれも論理実証主義に基づいている、と考えられる。これに対して、文化財アクション・リサーチは、研究者・住民・高校生が協同して、文化財としての伝建において「新たな連帯」の実現を目指すため、論理実証主義からやや外れることになる。しかし、伝建の担い手を発掘し、伝建のレジリエンスを高める試みとしては最も合理性が高い取り組みであると考えられる。

「蔵の街とちぎ」における文化財アクション・リサーチの導入として、最初に取り組んだのが栃木市高校生小論文コンクールであった。JR 栃木駅と栃木市庁舎周辺には特別支援学校高等部を含む九つの高校が集積しており、栃木市はかねてより学園都市としての性格を有して来た。これらの高校に通う学生の居住地は栃木県全域に散らばっているため、彼らは栃木市民とは限らず、伝建との関係は極めて希薄である。さらに伝統的な街並の中に高校生が立ち寄れる場所(本屋、コンビニ、カフェ、図書館、スポーツ施設、音楽施設、学習塾など)が皆無であり、嘉右衛門地区内で高校生に出会うことは極めて稀である。

こうした状況下で、高校生に「将来の伝建地区の担い手である」という自覚を持ってもらうべく、高校一、二年生を対象とした小論文コンクール(テーマ「2050年の栃木と蔵の街:安心安全に暮らせる町の未来像」)の開催に至った。これに関連して、高校生に伝建の実状を知ってもらおうと、夏休み中に街歩きワークショップを開催した。その中で、空き屋や高齢化、産業構造の転換、コミュニティの維持について考察してもらった。

100件を超える応募作品の中から入選作を選出し、応募内容をパネル化した(図1、2)。さらに、関東都市学会秋季大会の場でポスターセッションを行い、高校生本人が社会学や経済学の研究者に向けて説明することとした。入選作品の共通点として、日々の生活や部活動で発見した事柄をバネにして、蔵の街の将来像を構想し

ていた。例えば、高校でのボランティア活動を通じて地域防災の課題を把握し、伝建の中に応用する提案は、地域のレジリエンスの向上に大きく貢献すると考えられる。

こうした取り組みが功を奏し、小論文コンクール入選者を主体とした「栃木高校生蔵部」が結成される。彼らは平日には異なる高校に通っているが、休日になると「蔵の街とちぎ」の内外で行われるイベントに参加し、自ら焼いたシフォンケーキを販売し、ステージで歌を披露することで、伝建を舞台とした合同文化祭さながらの様相を呈した。

ここで蔵部の活動成果をチーム・エスノグラフィーで得た社会構造図に照らして評価してみたい(図4)。蔵部のメンバーらは自らの発案に基づき地域住民と共に防災訓練を企画・運営し、伝建内外の祭りで自らの活動の場を確保して「蔵充」を満喫するに至った。また、市長との懇談を経て将来の「蔵の街とちぎ」に関心を持ち、社会・福祉的な視点をポスターで発表することができた。この意味で、蔵部は乖離しがちな4つの位相を弾力的に結びつけ、地域住民の自治意識を高揚させることに成功したと考えられる。この点で、蔵部メンバーは防災と祭りの担い手としての資質を十分持ち、「蔵の街とちぎ」を持続的に発展させるための重要な人材である、といえよう。

ここで今後の課題について三点挙げたい。第一に蔵部自身の問題であり、イベントの度に蔵部のメンバーを勧誘し、組織の持続運営に腐心しているが、蔵部の運営をサポートしているのが栃木市生涯学習課であり、小論文コンクールが終了した後の継続も期待される。第二に市役所の問題であり、生涯学習課、防災課、福祉課、教育委員会伝建推進室など平時に連携が弱く、本来市役所が持っているはずの力が地域で発揮されていない。このため、蔵部が地域内の防災イベントや祭りなど、多様な場面で活躍することで、関係部局間の「新しい連帯」を促せるのではないかと期待される。第三に高校の問題であり、学校間を結びつける横断的な取り組みには総合防災や街の持続性に興味関心を持つ教諭の存在が不可欠である、と考える。



写真1 蔵部による蔵の街映画祭での合同文化祭の様子

小論文コンクールが終了した後の継続も期待される。第二に市役所の問題であり、生涯学習課、防災課、福祉課、教育委員会伝建推進室など平時に連携が弱く、本来市役所が持っているはずの力が地域で発揮されていない。このため、蔵部が地域内の防災イベントや祭りなど、多様な場面で活躍することで、関係部局間の「新しい連帯」を促せるのではないかと期待される。第三に高校の問題であり、学校間を結びつける横断的な取り組みには総合防災や街の持続性に興味関心を持つ教諭の存在が不可欠である、と考える。

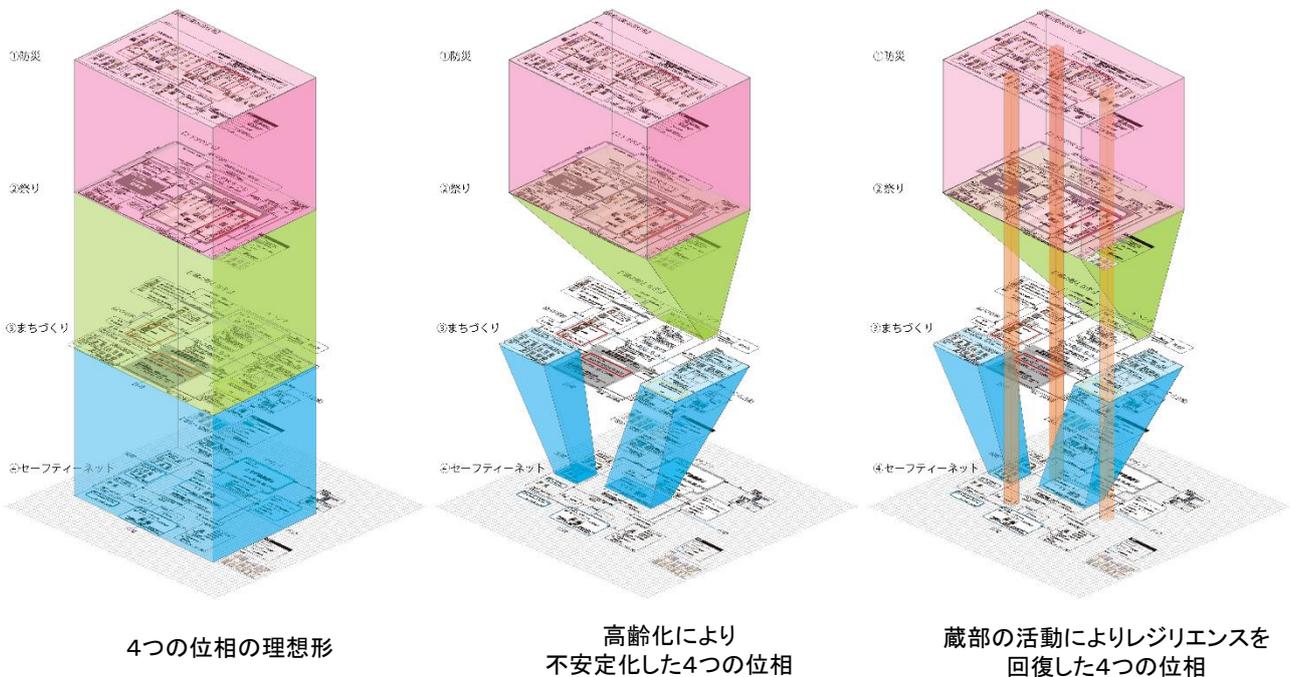


図4 「蔵の街とちぎ」の社会構造図に照らした蔵部の役割

参考文献 (下線の文献は本項に関する発表論文等を示す)

- 1) 豊川斎赫: 伝統的建造物群保存地区の担い手育成に関する実践と分析 栃木市内高校生小論文コンクールと「とちぎ蔵部」の来歴、日本都市学会 2014